

読書通信



No. 203

① 昨年取り上げた47冊の中からベストテンを選んできた(○数字は月号)。まずアンデシユ・ハンセン『スマホ脳』②は大ベストセラーになったがまだならせび。マイケル・ルイス『最悪の予感』⑨はさすがルイス、片山善博『知事の真贋』①、保阪正康『石橋湛山の65日』⑥、芝健介『ヒトラ』⑫も力作だ。小川仁志『むかしむかしあるところに哲学者がやってきた』④は異色の哲学入門。渡辺政隆『科学の歳事記』⑤、千足伸行『画家たちのパーストナー』⑥、猪木武徳『社会思想としてのクラシック音楽』⑧は楽

しみながら学ぶところ大である。コロナ感染防止には西村秀一『新型コロナの大誤解』⑧が絶対のお薦めで、残る37冊も捨てがたかった。

② 全国紙やキー局のジャーナリズム精神に疑問符がつく昨今だが、その点、地方メディアにはさまざまな優位性がある。しつこく一つのテーマに取り組む能力などはその最たるものだろう。松本創『地方メディアの逆襲』(ちくま新書、946円)に登場する記者たちはほんとにしつこい。さまざまに厳しい状況下でありながら、何年もかけて一つの問題を追う。あるいはドキュメンタリー番組を何十年と続ける。

彼らのひたむきさは感動的ですからある。岡山本社に異動しても前任地高松の事件を追い続ける記者と、それを認める会社。人口減の中で財

政的困難は増す一方だろうに、つい応援したくなる。登場するのは秋田魁新報、琉球新報、毎日放送、瀬戸内海放送、京都新聞、東海テレビ放送の6メディア。でも類似の例はほかにもたくさんあるはずだ。読み応え十分の力作である。

③ 日米地位協定の本は本欄でも何度か取り上げたが、伊勢崎賢治・布施祐仁『主権なき平和国家』(集英社文庫、682円)も好著である。何よりドイツ、イタリア、韓国、フィリピン、イラクが米国と結んでいる地位協定と比べて、日本の主権がまるで見えない現状を浮き彫りにしている点が秀逸で、さらに終章「地位協定改定案」も貴重である。「60年安保このかた日本から改定を提起したことは一度もなく、まるで米国の占領下にあるようだ」とする著者は、国

連PKOや政府代表として海外でも活動してきた「右でも左でもない」国防専門家。保守本流の人たちにもぜひ読んでもらいたいものだ。

④ 譚璐美『中国「国恥地図」の謎を解く』(新潮新書、968円)でいう「国恥地図」を知る人は少ないだろう。列強に奪われてきた旧国土を明示した地図を自虐的に呼んだもので、中華民国の時代に盛んに作られた。著者は多くの「国恥地図」を探し求め、それが現代中国によってどう利用されているか(例の九段線もその一つ)を論評している。思惑に満ち歴史の争点の多い「国恥地図」の変遷は興味深く、南シナ海(中国表記では南海)での活発な動きなど、不正確な歴史地図に依拠してその領土的再現を目論む中国外交を見る上でも大いに参考になる。(浅野 純次)